

『ルース』を読む ジョージ・エリオット

倉田賢一

ギaskellとジョージ・エリオットについては、お相いに敬意を払っていた同時代の女性作家として、またギaskellがエリオットに与えた影響について、¹ これまで論じられてきたところであり、本誌でもすでに廣野由美子先生による『ルース』と『アダム・ビード』の比較論がある。² いまその余白に書き込むべきことがあるとすれば、それは何であろうか。

さしあたってまず、両作家の作品（アート）と生涯（ライフ）の両面における絡み合いを考えるうえで、後者における媒介者としてG. H. ルイスの存在が重要であることは、正面から論じられてこなかったように見える。噂にすぎないといえはそれまでのことではあるが、ルイスがある女性に私生児を生ませて、その養親をギaskellが世話したことが、彼らの周辺ではささやかれていた。ローズマリー・アシュトンのエリオット伝によれば、つぎのとおりである。

There was also a story current among Marian's female friends Bessie Parkes and Barbara Leigh Smith that Lewes had at an unspecified time in the past seduced a young woman, who bore him a child. Mrs Gaskell was supposed to have found this child a foster mother.³

これは未出版の手記によるものだが、アシュトンのルイス伝には、その女性が文筆上雇われた人（“a young woman ‘who had been employed by him in some kind of literary work’”⁴）だったとある。仮にそれが事実であり、エリオットもそれを知っていたとしたら、どうであろうか。編集者のジョン・チャップマンに雇われてその愛人となり、ついでルイスの愛人となって文筆上の協力関係にはいったエリオットは、少なからず自分をこの女性に重ねあわせたはずである。そして彼女に養親を世話したというギaskellが、まさに捨てられた愛人の話を書いたのであ

るから、エリオットが『ルース』を発売とほぼ同時に読んでいることには、⁵彼女の個人的関心が反映されているのではないかと想像したくなる。ひるがえってギヤスケルの側でも、この件が（Pasley というお針子のモデルとならんで）『ルース』の執筆に反映されているのではないかと想像したくなる。

ここまではあくまで噂による推測だが、『ルース』が扱っている「アイデンティティの偽装」という問題に、エリオットはその後自ら直面することになった、ということは確実に言えるだろう。そしてこの点についても、ルイスとギヤスケルが関わっている。『アダム・ビード』を連載するにあたってジョージ・エリオットという男性名を使うことは、ルイスの強いすすめによるものだったが、ちょうど同じ時期に、ルイスは『シャーロット・ブロンテの生涯』を執筆中のギヤスケルに、カラー・ベルが女性であることを揶揄したルイスの書評に対する、シャーロットの怒りの手紙を送っている。ウィリアム・ドーリンはこのことを、エリオットによる男性名の選択と結びつけている。

In late 1849 and early 1850 [Lewes] had betrayed Charlotte Brontë, with whom he had established a friendship by letter, in an insensitive, hurtful review of her second novel, *Shirley*. [. . .] Lewes discovered Currer Bell's identity by chance, and could not resist making capital out of it in the *Edinburgh Review*. The review – which began ominously, declaring that the ‘grand function of woman . . . is, and ever must be, Maternity’ – not only trumpeted that ‘the authoress is the daughter of a clergyman!’ who must ‘learn to sacrifice a little of her Yorkshire roughness to the demands of good taste’, but demanded that Brontë stop ‘saturating her writings with such rudeness and offensive harshness, nor suffering her style to wander into such vulgarities as would be inexcusable – even in a man’. [. . .] In early 1857, when Marian Evans was assuming the pseudonym George Eliot, Lewes had not forgotten his discreditable conduct in this affair; for at about the same time he generously sent on to Elizabeth Gaskell the angry letters Charlotte Brontë had written him seven years earlier [. . .]. There can be no doubt that Brontë's experience was at the front of Eliot's mind when she decided to assume the pseudonym.⁶

ルイスにひどい扱いをされた女性をギヤスケルが応援した、という点において、この間の事情は先の噂と共通しているとも言える。

またギヤスケルは、エリオットがミス・エヴァンズであることを知るまえに、出版社をとおしてつぎのような手紙を書き、エリオットによるアイデンティティの偽装に直接的な介入を行っている。

Dear Mr. “Gilbert Elliott,”

[. . .] I have been suspected of having written “Adam Bede.” I have hitherto denied it; but I really think, that as you want to keep your real name a secret, it would be very pleasant for me to blush acquiescence. Will you give me leave? [. . .] So, although to my friends I am known under the name of Mrs. Gaskell, to you I will confess that I am the author of Adam Bede, and remain very respectfully and gratefully yours,

Gilbert Elliot.⁷

ヘイトの注は、さいごが single t のギルバート・エリオットは実在の牧師であり、ギヤスケルはその人がエリオットの正体だと考えたのかもしれないとしている。しかし宛名は double t になっていることを考えると、「ジョージ・エリオットであれ、ギルバート・エリオットであれ」という趣旨だったのかもしれない、あるいはたんにうろおぼえだったのかもしれない。この手紙は確かに冗談で書かれたものではあるが、冗談ではあれ他ならぬ『ルース』の作者が、まさにアイデンティティの偽装を申し出ており、かつニセの署名をしていることは、注目に値する。

このように、ギヤスケルとエリオットの実人生における絡み合いにおいて、いずれも『ルース』の中心的な主題である「墮ちた女」に関わる「アイデンティティの偽装」が重要な点となっているのである。より正確に言えば、『ルース』において中心的な問題は嘘をつくこと（すなわち、フィクションを語ること）の批判であり、その具体的な局面として、①アイデンティティの偽装（ルースの未亡人としての地位、およびレナードの嫡出性）、②ワイロ（ブラッドショー氏にとっての）、③署名偽造（リチャードによる）の三つがある、ということになるだろう。そしてこれらのなかでもアイデンティティの偽装が主要なものであり、その本質である嘘＝フィクションの問題をとおして、ワイロや署名偽造と結びつけられている。

嘘とフィクションは、ミス・ベンソンがブラッドショー氏にルースを紹介するさいの“Ruth’s (fictitious) history”⁸という表現や、それについての“I do think I’ve a talent for fiction, it is so pleasant to invent, and make the incidents dovetail together”⁹というミス・ベンソンの発言、またレナードが真顔で作り話をするので、ベンソン氏が体罰を加えようとするときの、あなたにそんな資格はないというサリーの発言¹⁰によって、等置されている。

そしてルースの偽装については、“the evil [Mr Benson] had done that good might come”¹¹とあるように、「目的は手段を正当化しない」という語りかたがされている。またつぎの二つの箇所においては、「結果を計算して行為すべきでない」とされている。一つめは捨てられたルースが、ベリンガム夫人が置いて行った金を送り返したことについての、二つめはルースがブラッドショー家の家庭教師になることを、ベンソン氏が心配しているくだりである。

It is better not to expect or calculate consequences. [. . .] Let us try simply to do right actions, without thinking of the feelings they are to call out in others.¹²

[. . .] My indecision about right and wrong – my perplexity as to how far we are to calculate consequences – grows upon me, I fear.’

‘You look tired and weary, dear. You should blame your body rather than your conscience at these times.’

‘A very dangerous doctrine.’¹³

結果が目的であり、行為がその手段だとすれば、「目的は手段を正当化しない」というのと同じになるが、加えて後者の引用では、body と conscience が対比されている。ひとがつねづね考えていることと、いざというときにとる行動はくいちがう、ということは、ベンソン氏がつねづね考えていることのようにであり、別の話題で、それは“The difference between theory and practice, thinking and being”¹⁴だ、というコメントをさしはさんだりしている。また考えるベンソン氏に対して、行動するミス・ベンソンという対比もなされている。¹⁵ これらをまとめれば、「結果について考えることは、存在から意識が遊離することであり、倫理的行為から

の逸脱を招く」ということになるだろう。

他方で、このような問題設定は主としてベンソン氏によるものであり、ルースはそのジレンマから自由であるように見える。この点については、前半の「墮ちた女」から後半の「改悛した聖女」へのルースの変化が説明されていない、ということが指摘されてきた。

The apparent contradiction in Ruth's character between her "living with her lover in North Wales and positively enjoying it" [*Ruth: Mrs Gaskell's Neglected Novel*, *Bulletin of the John Rylands University Library*, Spring Edition, 1976] compared with the nobility and spiritual maturity she later shows, without there having been any process of 're-adjustment', still puzzles modern critics, as it enraged Mrs Gaskell's contemporary critics.¹⁶

しかしより多くの論者は、ルースは元来イノセントであり、したがって実は改悛したというわけではないのだ、としているようである。そうであるとすれば、問題はルースにおけるイノセンスの内実とは一体何なのかということになる。

さしあたりそれは、ジェマイマが言うように彼女が“Transparent and sincere”¹⁷であること、すなわち、存在と意識のあいだが透明に代表されていることとして理解できる。この透明な代表をさまたげるものが、嘘＝フィクションであるが、それについてルース自身はほとんど悩んでいないように見える。これを可能にするものが、テキストで繰り返し強調される彼女の *selflessness* だということになる。すなわち、ルースは虚偽の意識を自己イメージとして引き受けていない。あるいは、もともと自己イメージが欠如した存在として描かれているのである。¹⁸この自己イメージの欠如については、例えばつぎの二つの箇所を示されている。

She obeyed, and could not help seeing her own loveliness; it gave her a sense of satisfaction for an instant, as the sight of any other beautiful object would have done, but she never thought of associating it with herself. She knew that she was beautiful; but that seemed abstract, and removed from herself.¹⁹

Please, I really would rather not be told if people do think me pretty. [. . .] I may be pretty, but I am not good. Besides, I don't think we ought to hear what is said of us behind our backs.²⁰

一つめは、ベリンガムに花を髪にさされて、池の中を見てみろといわれたところであり、二つめはジェマイマに可愛いといわれての反応である。特に後者の引用と対照的なのがブラッドショー氏で、彼の妻はジェマイマに“your father always likes me to tell him what everybody says in his absence”²¹といっている。つまり、他人における善人としての自己イメージを気にかけているのである。

たしかにルースは、名誉回復に値する「堕ちた女」として過剰に理想化されている、ということはしばしば指摘されるとおりである。しかし、テキストがひとつの理想の論理を提示していることは、それとして真摯に受け止めてよいことであり、その倫理の内実、存在からの意識の遊離を阻止するものは、自己イメージの機能の削減である、というものである。この *selflessness* ゆえに、ルースはベンソン氏たちから新しく学ぶことはあまりなく、むしろベンソン氏が実践できていないことをもともと実践しているということになる。他方で *selfless* ということは、ある意味で主体性がないということでもあり、ルースがパメラの演じたような抵抗もなくベリンガムの愛人になることも、アイデンティティの偽装について悩むのを他人まかせにしていることも、そのあらわれであろう。

この点についてジェーン・スペンサーは、ルースがベリンガムに対して示す *self-denial* はのちにルースの名誉回復の基礎となるが、それは矛盾を招いているという論じかたをしている。

Ruth's moral superiority and her passionate nature are therefore linked, a subversive implication that Gaskell can only put forward with the excuse of Ruth's lack of self-consciousness. This aspect of self-forgetfulness is paradoxically both the sign of moral vulnerability (unthinking, unknowing, Ruth falls) and of moral capacity: to forget self is the first of virtues for Gaskell, to be overly conscious of self a subtle yet strong moral danger. Hence she puts Ruth, in danger of seduction, in a contradictory moral position.²²

スペンサーによれば、「ルースの道徳性とセクシュアリティが表裏一体である」という転覆的な論理に対するエクスキューズとして、自己イメージの欠如があり、それがルースを道徳的に矛盾する立場に置く、ということになる。しかしそこにキリスト教的道徳性、ないしは性秩序をこえた、なおひとつの倫理であるようなものを見出すことができるならば、そこに矛盾はなく、むしろ自己イメージの欠如がその倫理を基礎づけるのだといえるはずだ。ひとつの過大な理想ではあるかもしれないが、ルースの自己イメージの欠如こそが、当時の社会的制約の限界内で最大限にセクシュアリティを追求し、また「墮ちた女」としては最大限に社会参加することを、彼女にとって可能にしているのだというべきではないか。その意味で、彼女は社会的制約ないし時代の道徳を転覆するというよりは、効果的に宙づりにしているのである。先にルースは悩むことを他人任せにしており、ある意味で主体性がないとしたが、むしろ自己イメージに悩まないことが、彼女に固有な主体性のありかただともいえる。ある意味では、むしろベンソン氏やブラッドショー氏のほうが、善人としての自己イメージに隷属しているからである。

ここでいささか唐突だと思われるのを承知で、吉田健一による森鷗外の『雁』の読解に触れたい。『雁』は高利貸しの妻が学生と恋をし損ねる話であるが、吉田は、登場人物たちにそれぞれが置かれた境遇があることを、鷗外がよく描いているとしたうえで、こう言っている。

これは〔中略〕一時代の風習と結びついている道徳の他に道徳があるということをお我々に教える。つまり、爺さんは現代風の考えでは、娘を妾に出したから、そして昔風の考えでは、高利貸しの妾に出したから非難されるのである。併しそれならば、爺さんと同じような境遇を全く現代風書き直して、お玉が銀行の社長に見初められてこれと結婚し、爺さんがその父親だということで別に一軒の家を宛てがわれ、楽な身分になったとしたらどうだろうか。境遇だけを言っているのであるから、人物によってはその方が遥かにみじめであるかも知れない。併し少なくとも、現代人の良心はそれで大分慰められるのであって、要するに、これは他愛もないことなのである。〔中略〕制度や、機構や、時代というものを、余り信用しないことである。我々は一度しかこの世に生まれてこない。²³

これをルースについて考えると、どうなるだろうか。あえてA.C.ブラッドレー流に、ルースをひとりの実在の人物であるかのように扱って、彼女に性秩序が崩壊した今日のイギリスを見せたら、はたして何と言うかを想像してみたい。ルースは「私の苦しみはすべて無駄だった」と地団太をふんで悔しがらうだろうか。私にはそうは思えない。彼女は『雁』の登場人物たちと同様に、「制度や、機構や、時代というものを、余り信用し」ておらず、たんに与えられた境遇のもとで最大限に生きようとしたのではないだろうか。むしろ性秩序の崩壊した今日のほうが「人物によっては遥かにみじめであるかも知れ」ず、²⁴そういう意味では性秩序の存在も不存も「要するに、これは他愛もないこと」だと、彼女はあらかじめ理解しているのではないだろうか。

こう考えれば、つぎのような疑念にもこたえることができそうである。

The novel cannot escape the contradictory status of its claim for Ruth's innocence, never quite managing to say that if fallenness is a societal construction, virtue must be as well.²⁵

貞潔に対応する墮落は社会的構築かもしれないが、美德そのものが社会的構築だとはいいきれない。吉田のことばでいえば、「一時代の風習と結びついている道徳の他に道徳があり、それがルースの体現する理想だからである。このような一種の「反時代的考察」こそが、性秩序が崩壊したあとに『ルース』から読み取るべきことではないだろうか。

その『ルース』をエリオットはどう読んだのだろうか。彼女は手紙でこう述べている。

[Ruth's] style was a great refreshment to me, from its finish and fulness. [. . .] 'Ruth', with all its merits, will not be an enduring or classical fiction – will it? Mrs Gaskell seems to me to be constantly misled by a love of sharp contrasts – of “dramatic” effects. She is not contented with the subdued colouring – the half tints of real life. Hence she agitates one for the moment, but she does not secure one's lasting sympathy; her scenes and characters do not become typical. But how pretty

and graphic are the touches of description! That little attic in the minister's house, for example, which, with its pure white dimity bed-curtains, its bright-green walls, and the rich brown on its stained floor, remind one of a snowdrop springing out of the soil. Then the rich humour of Sally, and the sly satire in the description of Mr Bradshaw. Mrs Gaskell has certainly a charming mind, and one cannot help loving her as one reads her books.²⁶

要点としては、①善悪のコントラストが過剰である、そして②描写がうまい、ということになるだろう。しかし注目したいのは、“she agitates one for the moment, but she does not secure one's lasting sympathy” という部分である。これは直接的には「コントラストが過剰で、凡庸さが描けていない」ということではあるが、「持続する共感 (lasting sympathy)」ということになると、エリオットにおける「共感」にこめられた一種の悪意を考慮に入れなければならないところである。のちに彼女の出発点となった「エイモス・バートン」は、凡庸を絵にかいたような人が、ひどく痛めつけられることではじめて周囲の共感を呼ぶというものだった。そこでは虐待が共感と相即している。そしてエリオットは、アイデンティティを偽装した「墮ちた女」であることについて、非常に自虐的に悩むことになる。彼女の実人生においても、自虐が創作をとおした共感の要求と相即しているのである。

『アダム・ビード』を読み終えたあとにある種の気持ち悪さが「持続」するとすれば、それはヘティがこれでもかというくらい痛めつけられたまま、放り出されているせいであろう。それに対し、『ルース』を読み終えたあとにそうしたものが「持続」しないとすれば、すでにテキストの中でルースが十分な共感を受けており、読者のことさらな共感を必要としないように見えるからではないだろうか。いわゆる「近代文学」のメルクマールが、本を閉じたあとも読者に考えさせつづけること、したがって文芸批評を生産させることにあるとすれば²⁷、エリオットの自他に対する悪意を含んだ「持続する共感」は、それによく応えるものだったということになるだろう。しかし先に論じたのは、『ルース』における自己イメージの削減が、人生に対するひとつの正しい回答かもしれないということであった。そうであるとすれば、エリオット（そして「近代文学」）の基準によるすぐれた小説とは、実は人生に対する悲劇的に誤った回答なのではないかと

いう疑念を抱くことは、避けられそうにない。

注

本稿は第26回日本ギヤスケル協会大会（平成26年10月4日、於明治大学）のシンポジウム「ヴィクトリア朝小説における社会領域とジェンダー」における発表に、加筆修正を加えたものである。

- 1 この点については、『ルース』が「墮ちた女」の主題を扱うことにおいて『アダム・ビード』に影響を与えたほか、「荒野の家」(‘Moorland Cottage’)と『フロス河の水車小屋』の類似性が論じられている (Ramona Lumpkin, ‘(Re)visions of Virtue: Elizabeth Gaskell’s Moorland Cottage and George Eliot’s *The Mill on the Floss*’, *Studies in the Novel*, Vol.23, No.4 (Winter 1991), pp. 432-442)。これはスウィンバーンが1877年の本で指摘したところであり、エリオットはこぶしを握りしめて盗用を否定した (‘[Eliot] became – though she never raised the low tone of her voice – almost vehement. “[Swinburne] suggested”, she exclaimed, and angrily doubled the fist that rested on her knee, “that I’d taken some things in *The Mill on the Floss* from a story by Mrs. Gaskell called *The Children of the Moor*” (Lucy Clifford, ‘A Remembrance of George Eliot’, *Nineteenth Century*, 74 (July, 1913), 116))。確かに類似性はあるが、実際に拝借したのであれば、主人公の名前くらいは変えたのではないだろうか。
- 2 「ギヤスケルとエリオット——『ルース』と『アダム・ビード』に見られる作家の道徳的姿勢——」(『ギヤスケル論集』第21号、日本ギヤスケル協会、2011年)
- 3 Bessie’s daughter Marie Belloc Lowndes, unpublished notes on her mother’s life, MS Girton. Rosemary Ashton, *George Eliot: A Life* (Allen Lane, 1996), p. 123.
- 4 Ashton, Rosemary, *G. H. Lewes* (Pimlico, 2000), p. 58.
- 5 後に引用するエリオットの手紙を参照。
- 6 Tim Dolin, *George Eliot* (Oxford University Press, 2005), pp. 106-7.
- 7 Ed. Gordon S. Haight, *The George Eliot Letters*, Vol. 3 (Yale University Press, 1954), p. 74.

- 8 Elizabeth Gaskell, *Ruth* (Penguin, 2004), p. 125.
- 9 *Ibid*, p. 126.
- 10 *Ibid*, p. 169.
- 11 *Ibid*, p. 212.
- 12 *Ibid*, p. 107.
- 13 *Ibid*, p. 166.
- 14 *Ibid*, p. 155.
- 15 *Ibid*, p. 170.
- 16 Anna Unsworth, *Elizabeth Gaskell: An Independent Woman* (Minerva Press, 1996), p. 89.
- 17 Elizabeth Gaskell, *Ruth*, p. 267.
- 18 ひとつの倫理としての自己イメージの削減については、倉田賢一『わたしたちが孤児だったころ』における日英の絡み合い（『英語英米文学』第55集、中央大学英米文学会、2015年）を参照。
- 19 *Ibid*, p. 64.
- 20 *Ibid*, p. 156.
- 21 *Ibid*, p. 182.
- 22 Jane Spencer, *Elizabeth Gaskell* (Macmillan, 1993), p. 61.
- 23 吉田健一『文学人生案内』講談社現代新書、1996年、41-44ページ。
- 24 小谷野敦が『もてない男』（ちくま新書、1999年）をはじめとする著書で論じていることである。
- 25 Audrey Jaffe, 'Cranford and Ruth', p. 56.
- 26 Ed. Gordon S. Haight, *The George Eliot Letters, Vol. 2* (Yale University Press, 1954), p. 86.
- 27 これに対してエンターテインメント小説においては、感情的反応（探偵小説の場合は、設定された問題の解決までも）がテキストの側で指示されており、読者は人生について考えこむことなく、ストレスを発散させることができる。倉田賢一『荒涼館』とその敵（『英語英米文学』第52集、中央大学英米文学会、2012年）を参照。

(中央大学理工学部准教授)

Abstract

***Ruth* and George Eliot**

Kenichi Kurata

While the mutual influence between Mrs Gaskell and George Eliot has been discussed by many critics, the role of G. H. Lewes as their mediator seems to have received scant attention. A contemporary rumour had it that Mrs Gaskell found a foster mother for an illegitimate child that was begot by Lewes. Lewes is also assumed to have played a vital role in Eliot's decision to use a male pseudonym, and at around the same time he sent Mrs Gaskell the letters from Charlotte Bronte about his exposure and ridicule of Charlotte's female identity. Thus the themes of false identity and the fallen woman are central not only to *Ruth* itself but also to the relation between the two writers. This article goes on to offer a close reading of *Ruth*, and demonstrates that where Ruth, who stands quite aloof from Mr Benson's qualms regarding her false identity, embodies a paradoxical ethics of ultimate subjectivity in a complete lack of self-image, Eliot's demand of 'lasting sympathy' seems to suggest her lasting subjugation to her own self-image.